http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.058　12/07/11

『論語入門』その２　（お説教つき）

昨日紹介した井波律子『論語入門』から。

＊

○子曰、君子和而不同。小人同而不和。

○子曰く、君子は和して同ぜず。小人は同じて和せず。

○先生は言われた。「君子は人と調和するが、みだりに同調しない。小人はみだりに同調するが、調和しない。」

人との交際に仕方について、君子と小人を対比させた有名な言葉である。「和」は、自分の考えかたや意見をしっかり保ちながら、人の考えかたや意見を尊重し、調和のとれた関係を結ぶことをいう。「同」は相手の顔色をうかがい、やみくもに同調する卑屈な態度を指す。主体的に毅然としつつも、他者と調和のとれた関係を結ぶことは、社会内存在である人間にとって、永遠の課題といえよう。

＊

友だちとどう付き合うかは、日比谷生にとっても「永遠の課題」であろう。調和のとれた関係が本当に結べれば、日比谷で出会った友だちは生涯の友だちともなる。一方、日常生活の中で表面的に「同」じているだけの友だちだけしか見つけられていないのなら、その理由をもう一度見直してみるべきだろう。

＊

○子曰、性相近也。習相遠也。

○子曰く、性相い近き也。習い相い遠き也。

○先生は言われた。「人のもともとの素質にはそれほど個人差はない。ただ後天的な習慣・学習によって距離が生じ遠く離れる。」

人の生のスタートではほとんど変わらないのに、以後の生きかた、学問のしかたによって大きな差異が生じるというのだ。もともと誰もがひとしく大いなる可能性をもつという、この人間観はまことに健やかである。通説では、こうした孔子の考えかたが体系化され、後世における儒家思想の性善説につながってゆくとされる。

＊

教員になりたての頃、ある教科書に「スプーンを使いこなす」？みたいなタイトルの評論文が載っていて、その内容は、子どもの脳の発達の可能性は無限であり、それ故、どんな子どもにも無限の可能性が開かれている、それが現代の脳科学の成果である、といったものだった。これは、上で述べられている孔子の人間観そのものといってもよいだろう。

「習」に関しては、等しく機会を与え、それをどう生かすかは本人次第といったところがある。特に日比谷はその傾向が強く、SSHにしても、講習にしても、伝統行事にしても、やりたい人はどうぞ…というのが基本的なスタンスである。機会はいくらでも設けるが、それを活用するかどうかは君たち次第だというわけだ。それはまた、授業中に寝ていたり、キューブをやっているのは自由であるが、そういうレベルの人間は相手にしないということでもある。機会が同じでも結果に大きな差異が出じるとしたら、その差異を生み出しているものは、自分自身の「習」に対する態度なのだということを自覚すべきだろう。